

Title	古城・北浜両先生をおくる
Author(s)	辻, 毅一郎
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学留学生センター研究論集. 2008, 12, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50672
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

古城・北浜両先生をおくる

大阪大学理事・国際交流推進本部長 辻 毅一郎

このたび古城紀雄教授、北浜榮子教授が定年退職に伴って、留学生センターを「卒業」なさることになりました。まことにおめでとうございます。大阪大学における国際交流の推進に関して、両先生のこれまでの貢献に感謝申し上げるとともに、一緒に国際化に取り組んできた仲間の一人として、おくる言葉を一言申し述べたいと思います。

私が大阪大学の国際交流に関わるようになったのは、20世紀から21世紀へと世紀が変わるミレニアムの時期に、当時の村井工学研究科長からの特命をうけ、経済学研究科の橋本日出男先生とともに、カリフォルニア大学との学術交流協定の更新に関わったのがきっかけでした。その後、私は工学研究科の国際交流の推進に徐々に関与するようになり、さらには留学生・研究者の受け入れサービスや海外拠点設立に関するワーキンググループへの参加を通じて、全学の国際交流事業にも関わるようになりました。平成16年、国立大学法人化に伴い、橋本先生は初代の理事・国際交流推進本部長に就任され、また私自身、はからずも留学生センター長に選出され、一期二年を勤めさせていただくことにもなり、これが両先生との深い関わりとなりました。

古城先生については、以前から工学研究科の国際交流推進活動や時折のゴルフ同好会を通じて存じ上げておりましたが、いざセンター長として留学生センターに赴いてみると、国際交流に関する全国的な場においてその存在感の大きさに感銘し、先生のこれまで積み上げてきた国際交流活動への献身や実績を改めて実感することになりました。センター長在任中は古城先生が副センター長としてしっかりと補佐して下さいました。とくに先生は留学生のケアについてのベテランで、いざというときに本当に頼りになる存在でした。そのため私はとくに苦労することもなく、何とかその任を

全うできました。深く感謝する次第です。

私の任期満了後、古城先生はセンター長に就任され、同時に国際交流推進本部会議のメンバーにも就任されました。当時、私は橋本先生のもとで、国際交流推進に関する諸施策の立案に当たっておりましたが、中でも大阪大学独自の奨学金制度の発足には、古城先生の多大なるご貢献が印象に残っています。制度発足後、奨学生を選抜するため幾つもの委員会が設置されましたが、それらの委員長就任をお願いしましたところ、この大変な作業、難しい判断を伴う職務を快く引き受けて下さり、制度の適切な運用を見事に行っていただきました。このことについてもただ感謝あるのみです。また、機会あるごとにパーティなどを催して下さい、軽妙な司会で座を常に暖かいものに導いて行かれるのには、心から敬服している次第です。これも長らく留学生の指導に当たってこられた先生の、コミュニケーションを大切にされるという信念の表れだと思います。

定年退職後も古城先生は、苛烈な競争を勝ち抜いて本学に新設された免疫学の世界レベル研究拠点の事務部門長として、引き続き大阪大学に関わっていただけるとのことです。長年培ったその人脈や見識を生かし、今後とも大学の国際化や留学生センター運営のために、大所高所からのアドバイスをいただけるようお願いしたいところです。

北浜先生は平成8年に大阪大学短期留学特別プログラム（OUSSEP）が創設されて以来、一貫して短期留学生の受け入れに携わってこられました。本学理学研究科の出身で阪大にこられる以前には、旧大阪外国語大学で理科系志望学生に対する教育などで成果を上げてこられたと伺ったことがあります。私がセンター長として赴任した時は、英語による教育一辺倒だったOUSSEPについても、発展的な改革を考える時期を迎えていました。北浜先生はプログラム運営10年の

それまでの経験と豊富なデータ、そして実行力を生かして、半年間参加のプログラムや日本語プログラムの創設などに積極的に働いていただきました。

最近では大阪外国語大学との統合にあたって、両者の交換留学プログラムを融合させるという難題に取り組んでいただき、新しいプログラムである OUSSEP-Maple をとりまとめるワーキンググループ座長の大役を果たしていただきました。従来からの OUSSEP と新たに立ち上げられた OUSSEP-Maple、そして複数の新プログラムが文科省に採択され、平成 20 年度に関しては、大阪大学が短期留学に対する奨学金獲得数で全国一となりました。そのお膳立てをさせていただいたのがまさに北浜先生であるといえるでしょう。

北浜先生に始めてお目にかかったのは私が OUSSEP の学生を引き受けたときでした。趣旨をご説明にわざわざ私の研究室まで来て下さり、先生の熱意に大変感銘を受けたことを覚えています。OUSSEP 学生一人一人への親身なケアは、私などもよく承知するところで、いつも修了式などで学生が感謝の言葉を述べるのを聞くたびに、先生の働きが本当

に実り多いものであるとの思いを強くしました。

北浜先生は、すでにサイエンスコミュニケーションに関する NPO を自ら立ち上げておられ、定年退職後は、その理事長としての仕事を専らにされると聞いております。大阪大学を離れても、その行動力や人脈を生かし、センターの運営や大学国際化について先輩として引き続きご指導をいただきたいと考えております。

やむを得ないこととは言いながら、大阪大学は古城・北浜両先生という有力な人的リソースを失うことになってしまいました。私としても強力なパートナーを失うことになり、誠に心細い限りです。その一方で両先生ともに退職後の身の処し方については、さすがと言わなければならないものであり、そのことがまたお二人の人柄を感銘深くさせております。今後は留学生交流や研究者へのサービスなどに関しての留学生センターの有力 OB, OG として、留学生センターや大阪大学全体を外部から見守っていただきたいと思っております。

あらためて、「ご卒業」おめでとうございます。

平成 20 年 3 月